## 455 骨斑紋症に対する骨シンチグラフィー

山岸嘉彦、奥山 厚、田島廣之、渡部英之、
疋田史典、孫田誠三、高岩成光、篠原義智、
大矢 徹、伊利なつき、今村純（日本医大 放）

最近経験した骨斑紋症2例、およびbenign bone island と呼ばれる本症患の単発のもの4例につき、$^{99m}$TcMDPによる骨シンチグラフィーを行った結果を報告する。何れも偶然X線撮影により発見された。斑紋はX線上円形～卵円形～楕円形で、大きさは多発では大部分が2mm～10mmであった。部位は長管骨骨端部および骨盤で、頭蓋、脊椎、肋骨には認められなかった。単発ではかなり大きいものもあり、大腿骨、脊椎に見られた。$^{99m}$TcMDPを10～20mCi静注、3時間後に撮像を行ない、単純X線像と共に比較検討した。単発、多発の夫々1例に、明らかなRIの集積を認めた。本疾患は臨床的に意義は少ないとされているが、集積あるときは病態が活動性であり、骨斑紋の増大あるいは減少の可能性が示唆されるので、経過観察が必要と思われる。また転移性骨腫瘍や他の硬化性疾患との鑑別も重要であり、骨シンチグラフィーはX線検査と共に有用な検査法である。

## 456 化膿性骨髄炎の骨シンチグラフイーにおける関心領域について

長谷川幸治、山田順亮（常滑市民病院 整形）
稲垣善幸（安城更生病院 整形）

化膿性骨髄炎の症例に対し$^{99m}$Tc－MDPによる骨シンチグラフイーをおこない、関心領域(ROI)を設定し定量的解析をおこなった。症例は15例で21歳から75歳で男11例女4例であり、罹患部位は大腿骨6例、脛骨6例、肩甲骨と上腕骨と踵骨は各1例であった。$^{99m}$Tc－MDPを20mCiを静注し3時間後に仰臥位で正確に5分間ガンマカメラでとり連結されたコンピューター（シンチパック1200またはVIP 450）に記録した。テープに記録された画像に対しROIを設定し、定量的解析をおこなった。ROIは病変部と健側の同一部位に設定し、uptake ratio すなわち健側のcountに対する患側のcountの比を求めた。uptake ratio と血沈、CRPおよび白血球数との関係をグラフに表わした。uptake ratio と血沈は正の相関を示し、回帰式は$Y=2.5+0.029X$ ($r=0.57$, $P<0.05$) となった。血沈の正常値を20mm未満（1時間値）と仮定し$X=20$を代入すると$Y=3.08$となった。したがってuptake ratioが3.0以上では化膿性骨髄炎は非常にactive であり、外科的療法が必要と考えられた。

---

## 457 血管柄付遊離骨移植における骨シンチグラフィーの役割

村井恒雄，大森薫雄，勝又壮一，大久保康一，根本文夫（神奈川県立厚木病院整形外科），室田景久，富田泰次（東京慈恵会医科大学）

広汎な骨欠損を有する症例，あるいは母床条件がかなり悪い症例に対して骨移植を行う場合，血管柄付遊離骨移植術を行なえば極めて良好な骨癒合が得られるものである。今回これらの骨移植術後の骨シンチグラム所見につき検討したので報告する。

方法；当院ならびに慈恵医大整形外科において施行した血管柄付遊離骨移植術例は，腓骨15例，腸骨8例であるが，これらの症例に対して，術後1週以内，4週，8週，12週，6ケ月，12ケ月と骨シンチグラフィーを施行し，その所見の経過を観察した。なお，骨シンチグラィーは$^{99m}$Tc-MDP15mCi静注後3時間で行った。

結果；従来の血管吻合を併用しない骨移植術の術直後骨シンチグラムは，移植骨を中心とする欠損像として描出されるが，本法を施行した場合では，早期から移植骨全体に集積を認め，特に骨接合部では高い集積を示し，骨折症例にみられるのと同じパターンで集積の増強，限局化，減弱していく傾向がみられた。特に術後1週間以内に行なう骨シンチグラフィーは，移植骨のviability 判定に重要な所見を与えるものと考える。

Presented by Medical*Online